

## 内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前 : Carlos Mariano Arbaiza Meza (カルロス・マリアノ・アルバイサ・メサ) (ペルー)
- (2) 年 齢 : 35 歳
- (3) 参加事業 :
- 1) 平成 26 年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(※SWY27 相当) 参加青年 (2014 年度)
  - 2) 平成 29 年度「世界青年の船」事業 (※SWY30 相当) ナショナル・リーダー (2017 年度)
  - 3) 平成 30 年度 明治 150 年記念「世界青年の船」事業 (※SWY31 相当) ファシリテーター (2018 年度)
- (4) 職 業 : ペルー応用科学大学 (UPC) 教授、岡山大学大学院生 (博士課程)



### ■ 参加のきっかけ

私は平成 26 年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY27 相当、以下「世界船」という。)について、ソーシャルメディアを通じて、また第 21 回に参加した教員仲間から話を聞き、事業の内容とその背後にある可能性を感じ、応募しました。世界船はここ 10 年、ペルーで大変知られるようになっており、告知と選考に関して、日本国大使館を事後活動組織がサポートしています。私の受験時には、9 名の枠に 500 名ほどが応募し、書類審査、エッセイの採点、社会活動歴、面接、そして「SWY キャンプ」という集団審査がありました。ペルー代表団に選ばれた後も、4 か月前から準備が始まり、週 2 回以上集まり、ナショナル・プレゼンテーションの練習や、日本を含む参加国の文化を学びます。日本という観点では、ペルーは日系人コミュニティが多いことで知られ、私の高校の友人にも日系人がたくさんいたため、彼らを通じて日本に興味を持っていましたが、当時はまだ日本について多くを知っているわけではありませんでした。

当時の参加動機として、私は知的にも精神的にも新しいチャレンジを欲していたからです。第 27 回世界船の時点で、私はすでに教育者として 8 年の経験を持つ社会人だったこともあり、**自分のコンフォートゾーンに慣れすぎてきた**感覚を持っていました。私は大学卒業後、20 歳から教員をしていましたので、いい教育を受け、比較的高い給与をもらう生活をしていました。しかし、**挑戦し、成長すること**を大切にしていたので、このままの生活を続けたら、人生はこのままで終わってしまうと思いました。コンフォートゾーンは悪ではありませんが、自分に「限界」を作ってしまうことも事実です。そこで、世界船に参加することで、対人関係スキルを高め、世界の様々な見方を理解し、自国を代表しつつ、高いパフォーマンスを発揮するチームの貴重な一員になりたいと思ったのです。**そして世界船は、私の期待を完全に超えました。**

## ■異なる立場での乗船

2度目は、平成29年度「世界青年の船」事業（SWY30相当）ペルー代表団のナショナル・リーダーとして参加し、多くの新しいチャレンジと、素晴らしい収穫がありました。多様な才能とバックグラウンドと高いスキルを持ったチームを率い、高いレベルのパフォーマンスを維持するのは、非常に難しいことでした。もちろん、ペルーを代表する団員たちをまとめるという責任も重く感じました。

ナショナル・リーダーとして参加した年は、11年間の教員生活で培ったスキルを発揮しながら、対人能力、リーダーシップ、外交スキルなどをより一層高めることができましたと思います。もちろん、参加青年として事業にかかわった時とは、役割は異なりますが、チームや事業実施に関わるすべての人との関わりの中で、社会性を身につけられ、今でも誇れるような実力が発揮できたと思います。



第30回世界船でのペルー代表団（筆者後列中央）

## その後、3度目はファシリテーターとして乗船されていますね。

平成30年度 明治150年記念「世界青年の船」事業（SWY31相当）では、コース・ファシリテーターに応募しました。第27回世界船への参加で、「教育」コースに所属しましたが、自分には参加青年と分かち合いたいことがまだまだたくさんあると思いましたし、また、教育をテーマにしたコースのファシリテーターになれば、私が最も情熱を注ぐ2つのこと、つまり「教育」と「世界船」を組み合わせることができる完璧なプラットフォームになると考えたからです。教育は世界平和を実現するためのツールであるとの信念の下、私は「平和な世界を築くための教育」というコースを提案し、ファシリテーターに採用されました。私はコース・ファシリテーターとなり、教育が、社会変革や真の国際社会の発展につながる鍵であるという前提を示しながら、異文化間教育、グローバル・シチズンシップ教育、インクルーシブ教育の必要性について参加青年と共有しました。その中で、まず参加青年に本人に自分の能力を自覚させ、自信をつけてもらい、次に教育的プロジェクトが

社会にどれだけ影響力をもたらすのかを知ってもらい、そらが、自分のコミュニティに展開できること、そこからさらに一般社会に広がっていただけることを伝えます。世界船は学校でもなく、教員養成機関でもありませんが、教育コースではワークショップを通じて参加青年のスキル開発をしました。このコースでは専門性ではなく、人として学びのプロセスを経験してもらい、教育関係者でなくても活かせることを伝えています。日本青年で教員志望の学生もいれば、教育関連の起業をし、異文化プログラムに関わっている人もいました。他国の青年では、教員の他に、教育学、社会学、心理学、人文学などを勉強する学生がいました。

### 3 回の乗船で、世界船での学びは違いましたか。

3 回の役割がそれぞれ違いますから、学びも違ったものになりました。参加青年としては国を代表してベストを尽くすという責務がありますし、ナショナル・リーダーは代表団をリードする他に、参加青年一人一人の才能を伸ばす役割、そして表敬訪問のチャンスも多いので、一国の首相や大統領にお会いする大きな責務がありました。ファシリテーターとして管理部門の一部になる経験では、いかに参加青年の経験を最大限にするかを考えていました。

#### ■ 最もポジティブな体験となった活動

私にとって、世界船で特に影響を与えた活動は 2 つです。1 つ目は、ナショナル・プレゼンテーションで、自国のプレゼン準備すること、他国のプレゼンを観客として見ることでした。相当な努力、調整作業、共同作業能力、文化的洞察力を必要とし、目を見張るものがあります。ナショナル・プレゼンテーションは、他の国や文化、現実を知るための窓口となります。プレゼンテーション準備にあたって、参加者は自国について知っていることを振り返り、自国の現実をより深く理解しようとします。また、**自国と他国の肯定的、否定的両面を認識**することができます。このようにして、私たちは学習においてあまり批判的にならず、適切な見方をすることができ、さらに私たちの現実を改善するための新しいソリューションやイニシアティブを考え出せるかもしれないのです。

2 つ目は、寄港地活動です。これは、自然な形で現地の人々と触れ合い、直接体験的に学ぶことができるユニークな機会です。ナショナル・プレゼンテーションと一緒に、私たちは他の文化を生きる、他の人々をより理解することを通じて、自分の視野を発見し広げることができました。オーストラリア（第 31 回）とスリランカ（第 30 回）では、先住民のコミュニティや教育機関、文化センターを訪問し、自分たちと彼らのコミュニティの異文化の違いや共通点を深く理解することができたと思います。そして、両国は、青年をエンパワーするイベントを実行する組織力が共通してすばらしく、すばらしいホストのもと、よくオーガナイズされていました。スリランカとペルーは新興国という意味で似ている国ですが、スリランカのプログラムを進行する熱量や意欲、そして政府と事後活動組織のコラボ、青年育成を重要視している点などに目を見張りました。また、オーストラリアは反対に大きい国ですが、事後活動組織の組織力がすばらしく、先住民文化、生活スタイルを見せてもらうことができました。

#### ■ 民間プログラムとの違い

世界船、航空機派遣事業、東南アジア青年の船その他の内閣府青年国際交流事業は、日本や海外の優秀な青年たちに**国際関係、文化間の関係のプラス面を理解させ、外国語（英語など）スキルの上達のほか、異文化の理解、社会的スキルの開発を学び、集団で成長する場**を作り出しています。また、このようなプログラムは、参加者自身が一般教養、例えば学問的、社会的、文化的な事柄への知識を向上させることができます。私は、**一国の政府が青年**

**育成にどれほどの関心を寄せているかを示すことは重要**だと思います。当然その世代が国の将来を担っているからです。これから社会に出ていく青年が、世界の現状を知り、他の文化との協働の方法を知るといのはとても大切です。一方で、民間プログラムは、通常、営利の目的、あるいは特定の経済利益に沿った動機付けがあります。

### ペルーにおける青年育成事業はいかがでしょうか。

ペルー政府主催では類似のプログラムはなく、海外留学したい学生が NGO や私立大学の留学制度や奨学金を受けることはあります。よって、国立大学、私立大学からも、優秀な学生を世界船に参加させたいと思いますし、直近の第 32 回でも全国から応募があり、社会人から大学生まで、この機会を掴みたいと思っています。ペルーでの青少年活動としては、ボーイスカウト、ガールスカウトのような団体、宗教団体の活動、NGO 主導の活動、大学での活動など様々です。政府主導のものはないということです。

### ■ 日々の生活で文化を尊重し、橋渡しをする

世界船では、「**学びに終わりはない**」と理解することができました。参加青年としての体験で、国家間の相互協力、貢献強化のために、私たちが多くの橋渡しができるのだと理解しました。私の場合、日本とアメリカ大陸（北米、中南米アメリカ）の関係に興味を持つようになりました。私たちは大抵一つの国、一つの文化に属していますから、その「メガネ」をかけて物事を見ているのですが、世界船では複数の「メガネ」をかけることもできますし、個々人の個性にも目を向け、尊重することができます。そして、違いが強調され争いになるのとは逆に、違いを超えてつながり、平等性が強調されます。私は日本に住んでいるので、日本の生活を通してより日本文化を知り、同化したり、感謝したりする日々ですが、どんな文化に暮らしていようと、**他の文化をリスペクトするのは自分たちをリスペクトすること**であり、大切です。今私の研究でも、日本人と外国人の交流をどう増やし、いかにスムーズなコミュニケーションにするかを扱っており、日本にいる留学生と日本の学生などを対象としています。

### ■ 日本の印象

海外における日本の一般的なイメージは、現実が伝わっているかといつかなり限定的です。一般的なイメージは決まってきたもので、メディアが知らせたいことだけだったり、武道やアニメが知られがちだったりします。私は**実際に日本に来たことで、まったく新しいイメージを発見することができました**。自国とはちがった、豊かな文化、豊かな歴史、伝統、道徳を持っており、尊敬、協力、調和的な成長に焦点が当たっていると思います。第 27 回は短い国内航海だったのですが、私にとっては日本に集中できるよい機会でした。岩手の津波の影響や、沖縄特有の文化などを学び、とても豊かな経験をさせてもらいました。そしてホストファミリーとの経験が素晴らしく、家庭や日常生活を見せてもらいました。そこでこれまで持っていた固定観念が崩れました。



岩手県での小学校訪問で、ペルーの位置を示す筆者

## ■ ファシリテーターとして参加青年の背中を押す

ファシリテーターとして参加した 第 31 回世界船 では、私が学業や仕事で学んできたことを共有し、**日本や海外の参加青年が自分自身をより大切にすること、個人と集団それぞれに成し遂げられることがあること、自分たちの地域や社会で行動する力をより強く感じられるよう、支援することができました。**私は PY セミナーの多くに参加しましたし、自由時間に一緒に遊んだり、食事したり、ナショナル・プレゼンテーションに出演してほしいと言われてたりもしました。誰かを動機づけるには、自らが手本となって引っ張ることも必要ですし、そのベースとなる信頼関係を築くことも必要です。できるだけ青年とは同じ目線で話せるようにしました。

## 日本青年は、はじめは「自信を持ってない」人も多いようですね。

日本青年は才能もあり可能性を秘めているにも関わらず、多くの場合「自信がない」ため、まずは**自分に力がある、自分がいかに色々なことができ、役に立つ存在であるかということを知ってもらうことが大切**です。自分が受け持つコースの青年、コース外の青年にもそのことを知ってもらいたく、常に働きかけました。もちろん謙虚であることはよいですが、遠慮しすぎてもいけないですし、傲慢と自信は異なるものです。自信と謙虚を組み合わせればいいのです。自信を持ってすれば、仲間が耳を傾けてくれたり、大きな影響を与えることができたりします。若さ故に、まだ自己イメージが確立していないことが原因としてあると思いますし、日本の教育では「能動的」よりも「受動的」（受け身）なことが多いかもしれません。そこで「完璧にやりたい、間違えたくない」という気持ちが出てしまうと、逆に挑戦しないということが起きてしまいます。単に聞くだけ、ノートを取るだけではなく、思い切って発言する、質問する、分からないことは聞くことで、他人が自分の意見を聞いてくれることも体験できるのです。ですから、変革を起こすためには、自分を信じる必要があります。そして大切なのは、「間違いをする、しない」ではなく自分を信じた上で「挑戦をする、しない」なのです。その挑戦は、自分の内側のエネルギーを解放し、発揮することですので、何歳でも挑戦でき、決して遅いということはありません。

## 現在は、日本の大学生、高校生の英語学習もサポートされていますね。

私は世界船に初参加した後に再来日し、教育者として、また学者として、大阪教育大学で1年半滞在し、日本人の英語学習においてストレスや不安などの感情的要因がどのような影響を与えるかについて研究しました。興味深い結果と改善案を得て、その研究を同大学リポジトリ（電子アーカイブ）で公開し、誰もがその情報を利用できるようにしました。その後2020年末に社会心理学博士課程のため再来日し、社会発展と相互の異文化理解に新たな戦略を模索しています。日本のスーパーサイエンスハイスクール（岡山県立天城高等学校）で、日本の高校生が研究プロジェクトを立ち上げ、国際語である英語でより自分を表現できるようサポートする機会も得ました。高校の他に、大学でも「ランゲージ・カフェ」を運営し、英語でファシリテーションをしています。大阪教育大時代、日本の学生・生徒が英語を話すときにストレスや心配がどう影響するかをリサーチしていました。高校生、大学生を見て思うのは、英語のことは十分分かっているのに、セルフイメージが繊細で、自分の能力への評価が定まらないことがあります。私自身も、英語を母語としていません。ですから私はみんなに「私があなたくらいの年齢の頃、あなたほどできてはなかったよ」と伝えています。時間がかかるかもしれませんが、まず自分で意志を持ち、達成したいゴールを設定して、英語がどれだけの世界を開いてくれるかに目を向けます。自分の才能を世界と分かち合うこと、他の文化から学ぶこと、海外とビジネスをする、関係づくり、そう言った達成したいことを考えれば、英語はツールでしかありません。誰もが「学習者」として自信を持ち、忍耐強く、そして間違えても恥ずかしくないことを、心がけてほしいです。

## ■ 船を使った国際交流の強みや意義

**他者を理解し、他者から学ぶには、同じ現実と空間の中で共存することが一番**です。船はその環境を提供してくれました。日々体験があり、日々学びがあります。**船は単なる移動手段ではなく、大きな家であり、ユニークな交流の場**なるのです。小さな交流から大きな協力体制を敷いた活動まで、船内活動は参加者が自分自身と他者について学び、協働し、集団での成果を上げ、実社会で必要とされる対人スキルや、内面（感情面）のスキルを身につけることができます。また、このような長期にわたる密接な交流は、文化や人々の間の橋渡しやコミュニケーションのつながりを作り、生涯続くネットワークを形成することができます。

## ■ 事後活動

世界青年の船事後活動組織（SWYAA）ペルーのメンバーと共に、事後活動として、世界船を自国内に、そして国際的にも広め、また、学んだことを地域社会に還元するために、様々な活動を行いました。どんな組織にも、情熱的な人もいれば、途中で離脱してしまう人がいますが、事後活動組織ペルーでは、**1年に一度大きな社会貢献活動をする**ようにしています。児童養護施設や高齢者施設へのサポート、青少年活動などです。事後活動組織ネットワークの良いところは、特定の専門性を持ったグループとして集まることもできれば、社会性、社交を中心に集まることもできることです。事後活動組織は、役員は毎年選任され、組織として動いていますし、航空機派遣事業（INDEX）の既参加青年も一緒に活動しています。また、パンデミック前は日本の既参加青年や元管理部の皆さんが毎年3-5名ペルーを訪問していましたので、「SWY+1」として、一緒に文化団体や社会団体を訪問し、ペルーでの日本文化紹介・マチュピチュを案内するなどしました。

このように、日本や他の国の友人とは多くつながっており、また、私の同期メンバー全員とも強い友情で結ばれています。私たちは皆、感謝の気持ちを忘れず、社会に良い影響を与えるために一緒に活動しています。

### 教育に関わる既参加青年らも、情報交換していますね。

私が立ち上げた「SWY Education Talk」という Facebook グループ（関係者のみ）があります。私が来日する 2020 年末まではアクティブだったのですが、教育や心理学ほか、社会的に重要なトピックについて、特別連続セミナー、ディスカッション、マイクロラーニングセッションを開催していました。このコミュニティには現在も約 250 人が参加しており、すべてのセッション動画は録画されているため、アーカイブで見ることができます。



「SWY Ed Talks」の様子

### カルロス・アルバイサ氏のプロフィール

学習障害、神経教育、認知行動療法、カリキュラム、言語学習を専門とする教育分野の専門家（学士号、免状、修士号）。16年にわたる国内外での実務経験を有し、小学校、高校、大学（学部と大学院双方）など、さまざまな教育レベルで勤務。現在は大学講師、専門セラピストとして勤務の傍ら、岡山大学博士課程（社会心理学）に在籍。若者を対象とした学際的チームを率いた経験もあり、社会奉仕、国際協力、個人及び仲間のエンパワーメントを目指している。講道館柔道の有段者、スポーツ愛好家でもある。